

# It is like a whole new world! 未知の世界へ



鳥取県西部総合事務所米子保健所  
医薬・感染症対策課  
医薬担当 課長補佐  
山田 まどか

鳥取県米子市出身。幼少期に病気がちであったため、自然と医療業界に興味を持つように。2013年自治医科大学医学部卒業。日本内科学会認定内科医・総合内科専門医、社会医学系専門医鳥取プログラム専攻医。鳥取県内で内科医として地域医療に従事しながら、第1子を出産し、現在育児奮闘中。2023年4月鳥取大学大学院医学系研究科博士課程に入学、同月より米子保健所にて勤務、現在2年目の新米公衆衛生医師。

地域医療に従事している際には内科医として、診療所や地域の中核病院で勤務してきました。患者さんと接する中で、改めて健康でいることの大切さを強く感じ、予防医療をはじめとした公衆衛生の大切さを実感する機会がありました。学生の頃は、公衆衛生にはまったく関心がなく、あの頃の自分が今の自分を見たら、きつと驚くことでしょう。公衆衛生医師になってからの気付きを自分なりにまとめてみましたので、少しお付き合いいただければと思います。

## 保健所で勤務を始めたころの 気づき〜公務員入門編〜

保健所で働き始めて、最初に驚いたことは、始業時に「県民への誓い」を職員間で唱和することでした。「県民への誓い」というのは、鳥取県職員として県民生活向上のために働くことを誓うという内容で、職員一人一人が心に共有する規範のことです。「県民への誓い」を唱和する際には、自分の業務が県民生活に直結しているものであ

ると強く感じます。

その他にも驚いたことが幾つかあります。行政あるあるが、かもしませんが、職種がまったく分からない、ということ。職位で呼び合うことが基本であり、職種（例えば、保健師なのか、事務職なのか）が分かりません。職種を勘違いして、まったく関係のない相談をすることもしばしばありました。

また、保健所職員の電話対応も含めた言葉遣いの丁寧さにはとて

に見ながら、過去の対応事例を参考にしながら見よう見まねで対応していました。

2022年から2年連続で救急出動件数が過去最多を更新しました。医療人材の高齢化や医師の働き方改革等の荒波が押し寄せ、この地域の救急医療体制をどう守っているのか、真剣に向き合う時が来ていると感じます。厳しくも優しい所長から指導を受けながら、今年度も「へき地・救急医療部会」の担当となりました。小さなことから少しずつ確実に前に進めていくことが地域の課題解決につながると思っています。

## 保健所業務を通しての気づき 〜ちよつと成長編②〜

2023年度は難病・感染症対策担当として、感染症発生時の対応にも当たりました。新型コロナウイルス感染症の5類移行後ということもあり、時期を問わずさまざまな感染症が流行しました。右も左も分からない自分は、そもそも何をしたらよいのか分からず、あたふたしていました。とりあえず教科書を引っ張り出し、感染症法における感染症分類について復習した記憶があります。テキパキと対応される保健師さんを横目

も驚きました。職員はよくコロナ対応で鍛えられたと言っています。行政用語が分からないという壁にもぶち当たりました。例えば、「簿冊を見に行く」と職員が言っているときには、頭の中で「菩薩を見に行く?」と勝手に漢字変換される、なんて信心深い方なんだろうと思うこともあり。そんなことが公衆衛生医師になってから最初に感じたことでした。

## 保健所業務を通しての気づき 〜ちよつと成長編①〜

最初に自分に課せられたミッションは、鳥取県保健医療計画の一部である西部保健医療圏地域保健医療計画の策定等に係る協議会の開催です。自分は救急医療・災害医療・へき地医療を議題として扱う「へき地・救急医療部会」を任

方が参加されていきました。このような多様な世界は公衆衛生の醍醐味であり、刺激的な日々がとても楽しかったです。

最初の集合研修での3週間は3歳の息子と離れ離れになるので、とても不安がありました。初めは息子が環境の変化に驚いて暴れ馬化していたようで、家族はとても大変だったようです。自分が家へ電話をすると息子が不穏になってしまうため、徐々に家族が電話に出てくれなくなりました(涙)。しかし、その間に息子は着々と環境に順応していたようで、後半の集合研修期間は良い子に過ごしていたようです。親も子も成長することができ、派遣元の職場、そして家族には大変感謝しています。

ここまでしっかりと講義を聞いたのは大学以来であり、公衆衛生について体系的に学ぶことができると大変貴重な機会となりました。健康危機管理、環境衛生、組織経営、対人保健等、多岐にわたる内容を教えていただいた先生方に感謝するとともに、この学びをこれからどう実践に生かしていくかが大切だと感じました。

されました。各分野とも課題が多く、議論が活発な部会です。日程調整、資料作成、関係書類の起草・発送など、一つ一つの業務が初めてのことばかりでしたが、戸惑いながらも、周囲に助けってもらいながら無事に会議を開催することができました。開催前はもろもろのこと、終了後も報告書の作成など慌ただしく、一通りの区切りがつくまでは毎日必死であったことを記憶しています。一連の業務を通して、開催者側の苦労がよく分かるようになりました。

また、一部分ですが、西部保健医療圏地域保健医療計画の改訂作業を担当してもらいました。伝えたいことを誤解されずに伝えるにはどうすればよいのかと、言語化することの難しさを感じました。全国的に救急出動件数が増加する中、鳥取県西部圏域でも

また、この研修の一番の成果物は、全国の仲間たちとのつながりができたことです。定期的に連絡をくれる仲間やZoom飲み会を開催してくれる仲間もいます。悩んだときにすぐに相談できる仲間ができたことはかけがえのない財産であり、この関係性を今後も大切にしていきたいと思っています。

## やまひ

先日、地元の鳥取大学の医学部に公衆衛生活動についてレクチャーする機会がありました。公衆衛生医師の業務についてよく知っている医学生は、残念ながら一人もいませんでした。重要な仕事なのに、周知されていないのはもったいないとコメントしてくれた医学生もいました。公衆衛生活動は表立って取り上げられる機会は少ないですが、地域保健を支える上で欠かせない土台となります。公衆衛生人材の確保も課題であり、自分の業務について自ら発信していくこともこれからの大切な役割の一つであると感じたとこです。